# 〈見えるもの〉と〈見えないもの〉

## ― クライストの「逸話」について ―[1)]

杉林　周陽

### 1．はじめに

1801年３月22日付で，クライストが当時の婚約者に宛てて送った手紙の中には，次のような記述がある。

> もし，全ての人間が眼の代わりに緑色のレンズをつけているとしたら，それを通して見るものを，緑色であると判断するしかないでしょう。そして，自分の眼が見せているものが，それらのもののありのままの姿なのか，それとも，眼がそれらのものの方ではなく，眼の方に備わっている何かを付け加えてはいないか，それを判断することは決してできないでしょう。悟性とはそういうものです。私たちは，私たちが真理と呼んでいるものが，本当に真理であるのか，それとも私たちにただそうと見えているだけなのか決めることはできないのです。もし後者であるなら，私たちが現世で集める真理は，死後には存在しないことになります。――そして墓の中にまで持っていくような財産を集めようとする，ありとあらゆる努力は無駄なのです――（強調は原文）（SWB 2, S. 634.）

この部分で「真理」に到達することができないという彼の絶望が表されている点から，この書簡は，所謂「カント危機」との関係で取り上げられる。クライスト研究において一定の意味を持つ「カント危機」なるものの存在については，一先ず脇に置いておく。それよりも本稿では，「もし，全ての人間が眼の代わりに緑色のレンズをつけているとしたら，それを通して見るものを，緑色だと判断するしかないでしょう（Wenn alle Menschen statt der Augen grüne Gläser hätten, so würden sie urteilen müssen, die Gegenstände, welche sie dadurch erblicken, *sind* grün ―）」という一節に注目する。気付かないうちに，眼に緑色のレンズが付けられているとしたら，見たものを緑色だと判断する

---

1）　本稿は2018年10月20日に岡山理科大学において開催された日本独文学会中国四国支部研究発表会での発表原稿を加筆修正したものである。またクライストのテクストは以下のものを使用し，引用文の末尾に略号 SWB とアラビア数字で巻数，ページ数を示した。Kleist, Heinrich von: *Sämtliche Werke und Briefe.* Hrsg. von Helmut Sembdner, Neunte, vermehrte und revidierte Aufl. 2 Bände, Carl Hanser Verlag, München 1993.

しかない（urteilen müssen）という表現は，それ以外の選択肢，可能性が予め除外されてしまっていることを示している。本来はそこに無いはずのものを付け加えた状態でしか見ることができない。このことに対する嘆きが，この時期のクライストにはあったと考えて良いだろう。

では，この「緑色のレンズ」という表現は何を表しているのだろうか。少なくともこの書簡の段階でクライストは，そのレンズが余計なものを加えてしまうために「もののありのままの姿」を見ることができないと主張している。そうすると，裏を返せば，このレンズさえ無ければ「もののありのままの姿」を見ることができるはずだということになる。このように考えるならば，「緑色のレンズ」は人間が「もののありのままの姿」へ辿り着くことを妨げる障壁，超えることの叶わない一種の〈人間の限界〉と言えるのではないか。このようなものとして捉えられる「緑色のレンズ」が彼の作家活動において，その後どのように変化していったのか，このことを検証していきたい。その際，上に引用した文に見られるような「見たもの」の解釈に関連する作品として，クライストの最晩年である1810年10月10日に『ベルリン夕刊新聞（以下，『夕刊新聞』)』に掲載された『神の鉄筆』と，翌11年１月10日付のものである『本当のようには見えない真実性』を取り上げる。

## ２．恣意的な「読み」―『神の鉄筆』

作家クライストは，その人生の晩年に『夕刊新聞』を編集，発行していたことが知られている。この新聞は1810年10月１日に創刊され，1811年３月30日に廃刊となった。その紙上で彼は，ベルリン近郊で起きた事件の報道のみならず，自身の散文作品の断片やエッセイ，また本論で採り上げることになる「逸話」を掲載していた。

ところで，1695年にカスパー・シュティーラーが初めて „Zeitung“ という単語を定義付けているが，それによると „Zeitung“ とは「今し方世の中で起こっているもめごとについて報道するもの」[2] である。そうした報道とは違う「読者が楽しみながら読めるようなものや教訓を含んだ記事や読み物」については「学術欄（Gelehrte Artikel）」[3] と呼ばれており，『夕刊新聞』では，その欄に「逸話」やエッセイなどの小品が載せられていた。そうしたものの一つのとして『神の鉄筆』がある。

手下の者たちを虐げる生活を送っていた意地の悪い女が死んだとき，その財産は，彼女に免罪符を与えた修道院に遺贈される。それに対して修道院側

2）　エーリヒ・シュトラスナー『ドイツ新聞学事始　新聞ジャーナリズムの歴史と課題』（大友展也訳）三元社，2002年，11頁。

3）　前掲書，58頁。

は，この女のために立派な墓を建ててやる。

以下に，この逸話の最後の部分を示す。

> 翌日，その金属を溶かしながら，雷がその墓石の上に落ちた。いくつかの文字の他には何も残っておらず，それらを拾い集めて読むと，こうなっていた。「彼女は裁かれた」―― この出来事（聖書学者であれば，それを説明してくれるかもしれない）は根拠づけられている。この墓石はまだあるし，その町には上述の文字共々，その墓石を見た人が現に暮らしているのだから。（SWB 2, S. 263.）

この話で最も印象的なのは，雷に打たれた後，残っている文字が「彼女は裁かれた」と読むことができるという部分であろう。生前，自分の家来たちを虐げていたという女の生涯と，この逸話の題である『神の鉄筆』から連想されるものを合わせて考えてみると，彼女がその死後に受けた裁きについて「神が文字を介して伝達を行っている」[4] かのように見える。しかし，実際に本文にあるのは，墓石には「いくつかの文字の他には何も残って」いないということだけだ。墓の碑文が書き換えられたのではない。ただ，雷が文字を刻んでいる「金属を溶かし」，その後に残った文字を「拾い集めて読む」と「彼女は裁かれた」と読めたというだけのことだ。しかも溶け残った文字から読み取ることができたこの文が，それらの文字を順序通りに読んでそうなったものなのか，それともアナグラムのように並び替えることでそう読めたのかということも明らかにされていない。ただ，„zusammen gelesen“，「拾い集めて読む」という言葉に基づいて解釈すると，この「彼女は裁かれた」という文は，連続した文字列からではなく，アナグラムのように読まれたのだと考えられる。[5] 溶け残った文字は連続していないのだとすると，文字と文字の間には空白があることになる。その場合，そこにある空白を埋めたり，また場合によっては意味を成すように文字を並び替えてやらなければ，「彼女は裁かれた」という文を見出すことはできない。つまり，この文は墓石の上に散らばっている文字を恣意的に読むことによって作り出されているのだ。

このような〈恣意的な読み〉によって作られた文の妥当性が，次の „Der

---

4）　新本史斉「„fall“ の相から見られた世界Ⅲ ― クライストの『ミヒャエル・コールハース』論」：津田塾大学紀要33号（2001年）123-146頁所収，134-135頁参照。

5）　新本は「彼女は裁かれた」という文を読み取る作業をアナグラムの解読作業としている。また「クライストにおいて『lesen（読む）』という行為は，そもそもの原義である『拾い集める』という行為へと差し戻されるのである」と指摘している。前掲論文，135頁。

Vorfall (die Schriftgelehrten mögen ihn erklären) ist gegründet;“ によって示されている。上記の通り，これは「この出来事（聖書学者たちが，それを説明してくれるかもしれない）は根拠づけられている」と訳すことができる。この他にも丸括弧の部分は「聖書学者たちは，この出来事を解釈したければすれば良い」と訳すこともできる。これらの訳の違いは，話法の助動詞 „mögen“ に由来する。さらに，この助動詞には，碑に残された文字の〈恣意的な読み〉に対して，クライストがどのような見方をしているのかが表れている。

„mögen“ を推量の意味で理解した訳が「聖書学者ならば説明してくれるかもしれない」である。ここには，作家クライストが文字の〈恣意的な読み〉，勝手な〈解釈〉に距離を置こうとしている態度を見ることができる。また，この助動詞を認容の意味で捉えると，同じ箇所の訳は「解釈したければすれば良い」となる。そう読むと，クライストの態度はより激しくなり，距離を置くというよりも，むしろ突き放しているかのような印象さえ受ける。

いずれにしても，話法の助動詞を手がかりにすれば，溶け残った碑文を「彼女は裁かれた」と解することは，クライストにとっては受け入れがたいようだ。雷に打たれた後でも残っていた文字をアナグラムのように並び替えて見ると，たまたま「彼女は裁かれた」と読むことができた。これがこの「逸話」に描かれている〈事実〉である。確かに「この出来事は〔……〕根拠づけられている」。しかし，その根拠として挙げられているのは「この墓石はまだある」ことと，「その墓石を見た人が現に暮らしている」ということでしかない。その文字が神意を示しているということまで「根拠づけ」ているものは，どこにも見当たらない。ところが，ここに神意を読み込もうと，つまり偶然の産物に過ぎないものに，原因となり得るものを〈後づけ〉してまで因果づけようとする者がいる。この行為はつまり，受け入れることができない〈事実〉„Tatsache“ に，それを受け入れ可能なものにしようとして，その原因となり得る „wahrscheinlich“ なものを付け加えて根拠づけ，真実らしさのあるもの，„wahrhaftig“ なものを作り上げようとすることである。

クライストがこの「逸話」の中に創った世界では，出来事や事実が「ありのままの姿」で受け取られていない。そればかりか，〈事実〉は，いわば恣意的に歪められ，〈解釈〉されてしまう。書簡でクライストは「緑色のレンズ」のせいで，人間は「もののありのままの姿」を見ているのか，それとも「眼の方に備わっている何かを付け加えて」いるのか判断できないと書いている。その眼に映るものが「眼の方に備わっている何か」を「付け加え」られ，その像を歪められることで「ありのままの姿」ではなくなっているのかもしれない。そう考えたからこそ，彼は絶望に至った。この「逸話」で描かれている人々は，まさにそのようにして「ありのままの姿」を歪めて見ることを実

行する存在として描かれている。クライストは，そうした人々とは距離を取っている。その距離をもって相対化して見ることによって，彼はその人々が体現している〈人間の限界〉をここに表しているのだろう。

## ３．『本当のようには見えない真実性』

### １）『本当のようには見えない真実性』

『本当のようには見えない真実性（以下，『真実性』）』は，ある年老いた将校が一同の前で三つの物語を話し聞かせるという態で書かれている。それは次のような内容である。この将校がライン戦役に従軍した際，ある兵士が銃弾で体を撃ち抜かれる。帰営後に外科医がその傷を診察すると，撃ち込まれた弾丸は胸の骨を貫通するだけの力がなかったため，肋骨と皮膚の間で体の中を巡り，最後に脊椎に当たるとそこで方向を変え，体外に飛び出したということがわかる。銃創と，その傷による熱を少し出しただけで，兵士の身には他に何も起こらなかった。二つ目は将校自身がケーニッヒシュタイン近郊，エルベ川の河畔にある採石場で目撃した出来事だ。あるとき，高所から巨大な岩が川辺に落下し，その影響で木材を満載した船が，川から岸へと打ち上げられる。この打ち上げられている船を目撃した彼は，岩が落下した風圧で川の水が溢れ，船を岸へ運び，そして水が引いた後，船だけがそこに残されたのだろうという推測を語る。最後はネーデルラント独立戦争時の出来事についてである。パルマ公爵によるアントワープ包囲戦において，川を封鎖している浮き橋を爆破する作戦が相手方によって実行されたとき，その左岸に立っていた旗手は，爆風で川の右岸まで吹き飛ばされる。その川幅は砲弾の射程距離ほど離れているのだが，彼はその距離を爆風によって吹き飛ばされたにも関わらず，無傷で済んだ。

将校が語るこれらの話は，まさにこの逸話の題にもある通り，「本当のようには見えない」。彼は，その話を物語る前に次のように言っている。

> 「三つの物語」と，ある老将校が仲間たちのところで言った。「それを私自身はすっかり信用しているが，私がそれを語ろうとすれば，ほら吹きと思われてしまう恐れがある。と言うのも，人々は第一の条件として，真実には，それが本当らしく見えることを要求するからだ。しかし，本当らしく見えるということは，経験が教えてくれるように，常に真実の側にあるとは限らない。」（SWB 2, S. 277f.）

このように言うことで，将校はこれから語る話が，たとえ荒唐無稽に思えたとしても，それが真実だと考えられると主張している。

改めて個々の内容について見ていこう。まず最初の物語であるが，「本当のようには見えない」のは，言うまでもなく，兵士が受けた弾丸が体の中を巡り，銃創の他には熱を出した程度で，ほとんど無傷であったという点だ。

> 晩に，我々は宿営へ行き，そこに呼ばれた外科医が彼の傷を診察した。そして，弾丸は胸の骨を貫通するだけの威力がなかったので，それに弾き返され，肋骨とゴムのようにしなる皮膚の間で体を一周し，脊椎の端にぶつかったところで，初めて垂直方向の動きへと戻り，皮膚から再び体外へと飛び出したことがわかった。（SWB 2, S. 278.）

このような，普通に考えれば理解できない出来事を前にして，医者は目の前にある〈結果〉から遡り，それが彼にとって最も「本当のように見える（wahrscheinlich）」ように出来事を再構成している。そうすることで，兵士の体内で「おそらく起こったであろう」[6] ことの推測を試みている。そこで導き出されたものを将校が一同に語るのだが，彼らにはそれが「本当のようには見えない（unwahrscheinlich）」。

続く二つ目の話も，やはり同じように将校の体験に基づいて語られている。

> 岩は（このことが重要なのですが）直接エルベ川の中へ落ちたのではなく，この地帯の砂地の上へ落ちた。一艘の船ですよ，ご一同，それが落下の影響だったんだが，その落下が引き起こした風圧によって，砂地の上に運ばれていた。（SWB 2, S. 279.）

先程の兵士の話同様，これを語る老将校は，実際にその瞬間を目撃したわけではない。彼が現場に到着したときには，既に船は岸に打ち上げられていた。ここでも先の逸話同様，なぜこのようなことが起こったのかということについて，推論が繰り広げられている。

> エルベ川全体が（その表面が）一瞬溢れだし，反対の平たい岸へ流れ込んだ。そして船を一個の固体として，そこに残したということが本当のように見える。平らな器の中で水が揺さぶられると，その上に浮かんでいる木の欠片が，その器の縁に残されるのと同じように。（強調は筆者）

---

6） Adams, Dale: Nicht immer auf Seiten der Wahrheit: Wahrscheinlichkeit und (Un)Wissen und Kleists Unwahrscheinliche Wahrhaftigkeiten. In: Lü, Yixi/ Stephens, Anthony/ Lewis, Alison/ Vosskamp, Wilhelm: *Wissenfiguren im Werk Heinrich von Kleists.* Freiburg im Breisgau, 2012, S. 207-222, hier S. 219.

（SWB 2, S. 280.）

このように彼は自分が見た現象について，それがどのようにして起こったのかということを，器の実験例を挙げつつ推測する。この推測を語る直前，彼はその内容が「本当のように見える」と述べている。さきほどの話にあった外科医の診察と同じように，将校は岩が落下する瞬間を見てはいない。そのため，ここで披露されているこの内容もまた，それが最も「本当のように見える」というものでしかない。

以上の二つの逸話で起きる「本当のようには見えない」出来事では，どちらにおいてもその発生の瞬間には立ち会っていない者が，それがどのようにして起こったのか調査しようとしている。その際，彼らは結果から遡って「出来事の再構成」[7] を試みている。そして，結果とそこに到る経緯との間に欠けている「どのようにして起きたのか」を示す部分を埋めようとしている。[8] しかし，それはただ最も「本当らしく見える」ものをはめ込んでいるに過ぎない。そのように見えるもので調えてみたところで，出来事自体は「本当のようには見えない」。だからこそ，将校がそうした出来事を語っても，一同は笑いを抑えるのに苦労したり，「奇妙な」と声を上げるだけで，信じることができないのだ。

この『真実性』の中で将校によって語られる三つの物語を比較すると，これから見ていく最後の話だけ，他の二つの話とは決定的に異なっている。それは，この再構成の有無だ。最後に語られている話では再構成をする代わりに，その話の出典が示されている。

> これで話は終わりです，と将校は言い，杖と帽子を取り，立ち去った。隊長，と他のものたちが笑いながら叫んだ，隊長と。―― 彼らはせめて，彼が真実だと主張する，この変わった話の出所を知りたがった。
>
> 行かせてやりなさい，と一同のうちの一人が言った。この物語はシラーが書いたネーデルラント連邦共和国の離反の補遺に載っている。この著者がはっきりと述べているのには，詩人はこの事実を使わないかもしれないが，歴史記述者は，その出所に非の打ち所が無い点と証拠が一致している点をもって，このことを書き加えざるを得ない。（SWB 2, S. 280f.）

このように話の出所についての言及がなされている。なぜこの旗手の逸話

7）Ebd.
8）Vgl. ebd., S. 220.

のみ，出典が示されなければならないのだろうか。始めの二つの逸話では，それを語る将校の方で，既に出来事に〈解釈〉を加えてくれていた。しかし今回はそれが加えられていない。言うなれば〈未加工〉のままで出来事そのものが突き付けられている。

将校が冒頭で宣言している通り，彼が語る逸話は全て「本当のようには見えない」。しかし，上述のように，始めの二つの逸話は将校の側で〈解釈〉をし，しっかりと〈後づけ〉する形で因果関係が成立するよう調えてくれている。たとえその話が「本当のようには見えない」としても，その過程をしっかりと踏まえてくれているからこそ，一同はその話が「本当のように見える」のか，それとも「本当のようには見えない」のかということについて考えを巡らせることができるのだ。しかし最後の逸話では，〈解釈〉が加えられていない〈未加工〉の出来事を突き付けられている。すると彼らは「せめて」と出所を知りたがる。つまり彼らは〈未加工〉の出来事に晒されていることが耐えられないのだ。〈後づけ〉で因果関係を成立させようにも，それをしてくれるはずである出来事の目撃者はいない。だからこそ，彼らは出所を必要とする。そこから明かされる内容を見ると，一応保証されることになるのは「出所に非の打ち所がない点と証拠が一致している点」だけである。要するに単なる状況証拠でしかない。〈解釈〉が加えられていない〈未加工〉のままの「本当のようには見えない」出来事・〈事実〉を受け止めるためには，そんな状況証拠程度のものであっても必要なのだ。こう見ると，この一同は『神の鉄筆』で碑文を恣意的に読む人々と重ね合わせることもできるだろう。つまり彼らもまた，〈人間の限界〉を体現する存在なのだ。だが，ここで描かれている一同は〈恣意的な読み〉さえできない。その意味において，彼らが表す限界点は，さらに低いものだと言えるだろう。

そうした人々がいる一方で，この『真実性』では，もう一人別の聴き手が存在している。それが田舎貴族（der Landedelmann）だ。将校の語る逸話に対する彼の反応は，一同のそれとは異なっている。次節では，この違いが何を表しているのか，それについて考察していくことにする。

２）二種類の聴衆

最後の逸話を語り終えると，将校は「おわかりになりましたか（Haben Sie verstanden?）」と聴衆に向かって話しかけている。それまでは，彼の話が一つ終わるたびに，まずはそこにいる聴き手一同の発言や様子が描かれていた。こうした将校の姿もまた，他の逸話では見られなかった点だ。

ところで，この疑問文で彼は何についての理解を問うているのだろうか。この質問が投げかけられたとき，それ以前とは異なり，田舎貴族が真っ先に

「あなたは何というお人だ」と反応している。その後，一同が笑いながら，将校に「彼が真実だと主張する，この変わった話の出所を」訊ねている。この二通りの反応の内，前者はこれだけを見ると何について答えたものかわからない。一方の後者は，上述の将校の質問に対して答えたもののように見える。いずれの答えから考えてみたところで，将校の質問が「何を」問うているのかということは明らかにならない。そこで，この最後のエピソード以外で一同と田舎貴族が，それぞれの話に対してどのような反応を示しているか，それを改めて確認してみたい。

まず銃弾に当たった兵士の話を聴き終わったとき，一同は「自分たちが正しく聴いていないと思った」と，その内容が信じられないという反応を見せている。一方で田舎貴族は「確かにあなたは正しい。この話は信じられない類いのものだ」と言っている。続いての逸話に際しては，前者は「岩は〔……〕エルベ川の中に落ちなかったのか」と将校に訊き直し，彼が「いいや」と答えると「奇妙な」と声を上げている。それに対して後者は「あなたは自分の命題（seinen Satz）を証明する話を上手く選ぶことができている」と述べる。

こうして並べてみると，一同は常に将校が語る話の真偽を気にしている。一方の田舎貴族は，将校が三つの逸話を語る前に述べた「それを私自身はすっかり信用しているが，私がそれを語ろうとすれば，ほら吹きと思われてしまう恐れがある」という命題を上手く証明している点に関心があるように見える。彼らは全く同じ話を聴いているが，それぞれが別々のことを気に掛けている。つまり，この「逸話」には〈二種類の聴衆〉が描かれているのだ。

ところが，そうした彼らは，「逸話」の最初から最後まで同じ重要度でもって扱われているわけではない。彼らの間には語り手の側からの差異，あるいは区別がつけられている。上述の通り，最後の話を語り終えると将校は「おわかりになりましたか」と訊ねている。まずこれに答えるのは田舎貴族だ。彼は「あなたは何というお人だ」と言う。それから一同がこの話の元を訊いている。実は，この場面では注目すべき変化が見られる。ここで田舎貴族を除く者たちは，それまで彼らを表していた「一同（die Gesellschaft）」から「他の人々（die andern）」と違う呼称に改められているのだ。将校が語り始めたとき，両者は同じ「一同」として描かれていた。それが，将校が最初の逸話を語り終えると，両者は分けられ，別の存在として区別される。一同は相変わらず „die Gesellschaft“ であるが，田舎貴族は „ein Landedelmann“ となる。その次の逸話でも状況は変わらない。聴衆は „die Gesellschaft“ と „der Landedelmann“ のままである。それがこの最後の場面に来て前者が「他の人々」というように，これまでとは違う描かれ方をする。始めは一つの集団であった „die Gesellschaft“ から „ein Landedelmann“ が飛び出し，最後には

将校の問いに真っ先に反応するほどまでに際立たされていくのと反比例し，„die Gesellschaft“ は最終的には „die andern“ にされてしまっている。

では，いったい何のためにこの扱いの違いが必要になるのだろうか。これは，将校の発する「おわかりになりましたか」という問いに対して，さらに言えば，それまでに彼が語った話を「正しく」理解できているかどうかを示すためではないか。そうだとするならば，それができているのは田舎貴族だけだということになる。そうすると，この「逸話」では将校が語る話の真偽ではなく，むしろ，その語る方法が問題とされていることになる。それによって表されるのものとは，いったい何なのだろうか。

この『真実性』において，田舎貴族を除く聴衆一同は，将校が予告していた通り，「本当らしくは見えない」逸話を語る彼を「ほら吹き」だと見なしている。なぜなら，彼らは「真実には，それが本当らしく見えることを要求」し，更に「本当らしさ」は必ず「真理の側に」なければならないと考えているからだ。その一方で，田舎貴族はそうしたものには一切関心を示していない。彼は，ただ将校が予告した通りに事が進んでいくことに驚嘆している。いわば彼は〈メタ〉レベルの聴衆なのだ。そうすると，この「逸話」では「本当のようには見えない」話を語る人物と，そういう話を「ほら話」だとしか受け取れない聴衆，そして，将校が自らの予言を見事に実現していく様に感動する者という三者が描かれていることになる。

## ４．まとめ

『神の鉄筆』では因果関係が理解できないために受け入れられない〈事実〉に対し，それが可能になるようにしようと，その原因となり得る „wahrscheinlich“ なものによって〈後づけ〉で因果関係を根拠づけている。そうすることで，真実らしきもの，„wahrhaftig“ なものを作り上げる人々が描かれている。『真実性』でも同じように，因果関係がわからないため，簡単には受け入れることができない〈事実〉に関する逸話が語られている。だが，ここではそのような〈事実〉を „wahrhaftig“ なものにするために付け加えられるのが，あろうことか「本当のようには見えない（unwahrscheinlich）」ものなのである。そのため，聴衆である一同は，その話を「ほら話」だとしてしか受け取ることができない。だが，そうしたプロセスを経ていない，すなわち理解することができない〈事実〉が「ありのまま姿」で提示されてしまうと，彼らはそれを受け入れることさえできない。その一方で，将校が語る内容ではなく，彼が予告していた通りに命題を証明していく姿に感嘆する田舎貴族がいる。『真実性』において語り手は，話が進むにつれ，田舎貴族の存在を際立たせようとしている。ここから，この「逸話」においては，将校が

自分の命題を証明していくことがテーマになっていると読むことができる。こうした様子を描く作家クライストは，そこに何を見ているのだろうか。

クライストが創り出す作品世界やそこで起こる出来事は〈未加工〉のまま提示され，まさに「本当のようには見えない」。だからこそ，多くの場合，我々はそれを俄には受け入れることができない，耐えられないのだ。しかし，この『真実性』を下敷きにして考えてみると，そうした〈未加工〉のものこそがクライストにとっての〈事実〉なのである。そして，この「逸話」では，まさしく作家としてのクライストとその読者の姿，その関係が描かれているのだと考えられる。つまり，この『真実性』という「逸話」は，彼の „Dramaturgie“ にまつわる一種の〈思考実験〉，それを表すものでもあるのだ。

# »das Sichtbare« und »das Unsichtbare«

## — Über die Anekdoten Heinrich von Kleists —

Noriaki SUGIBAYASHI

In einem Brief an seine damalige Verlobte schrieb Heinrich von Kleist: „wenn alle Menschen statt der Augen grüne Gläser hätten, so würden sie urteilen müssen, die Gegenstände, welche sie dadurch erblicken, *sind* grün —“. Der Inhalt dieses Briefes zeigt deutliche Bezüge zur sogenannten Kant-Krise auf. Diese „grüne[n] Gläser“ bedeuten meiner Meinung nach eine »Grenze der menschlichen Fähigkeiten«. Im folgenden Beitrag werden Kleists Anekdoten *Der Griffel Gottes* und *Unwahrscheinliche Wahrhaftigkeiten* im Zusammenhang mit der genannten Grenze menschlicher Fähigkeiten betrachtet. Dabei geht es darum, wie diese Grenze sich verändert.

In *Der Griffel Gottes* werden die Buchstaben auf dem Leichenstein der geizigen und grausamen Dame durch einen Blitz teilweise geschmolzen. Daraufhin können die stehen bleibenden Buchstaben zusammengelesen werden und ergeben die Worte „*sie ist gerichtet*!“ Ohne die Lücke zwischen den Buchstaben zusammenzufügen und sie anagrammatisch zu lesen, kann der Sinn des Satzes nicht entstehen. Aber dieser Sinn selbst enthüllt die Willkürlichkeit des Lesers, d. h. die vorangehende Geschichte in diesen Sinn hineinzuziehen. „Der Vorfall (die Schriftgelehrten mögen ihn erklären) ist gegründet“, so lautet ein Satz im Text. Anhand des Modalverbs „mögen“, das zum einen als Vermutung und zum anderen als Zugeständnis aufgefasst werden kann, darf man den Text folgendermaßen auslegen: Der Autor Kleist nimmt von solcher Willkür Abstand. Mit Bezug auf die Aussage aus dem Brief an die Verlobte kann diese Willkür als »eine Grenze der menschlichen Fähigkeiten« verstanden werden.

In *Unwahrscheinliche Wahrhaftigkeiten* spricht der alte als Erzähler dargestellte Offizier zuerst über die erste Bedingung der Wahrheit, „dass sie wahrscheinlich sei; und doch ist die Wahrscheinlichkeit [...] nicht immer auf Seiten der Wahrheit.“ In den ersten zwei Geschichten, die die Zuhörer jedoch kaum glauben können, lassen sich die Handlungslücken, die sich zwischen dem Ergebnis der Vorfälle und deren Verlauf ergeben, füllen: anhand der Untersuchung der Wunde durch den Chirurgen in der ersten Geschichte und durch das Experiment mit dem Gefäß in der zweiten. Um die Lücken zu füllen, werden die Vorfälle auf ihre Entstehung zurückgeführt — mit anderen Worten, es wird eine „Rekonstruktion des Vorfalls“ (Dale Adams) vor-

genommen. „Die Gesellschaft“, die wie der Leser in *Der Griffel Gottes* unter der genannten »Grenze« der menschlichen Fähigkeiten leidet, kann den Vorfall in der dritten Erzählung weder verstehen noch glauben und muss überdies versuchen, „die Quelle der [...] Geschichte“ zu erfahren, weil hier ohne „Rekonstruktion“ erzählt wird.

Darüber hinaus werden in dieser Anekdote »zwei Publika« angesprochen. Das eine ist die oben genannte Gesellschaft, das andere ist „der Landedelmann“. Er interessiert sich nicht für den Inhalt der drei Geschichten, sondern für die Vorankündigung des Offiziers: „»Drei Geschichten [...] sind von der Art, dass ich ihnen zwar selbst vollkommen Glauben beimesse, gleichwohl aber Gefahr liefe, für einen Windbeutel gehalten zu werden«.“ Der Landedelmann wird bewundert, denn der Offizier realisiert seine Vorankündigung. In diesem Prozess hebt der Landedelmann sich als ein Verstehender dieser Vorankündigung von der Gesellschaft ab und umgekehrt wird diese Gesellschaft von dem Erzähler als „die andern“ benannt; d. h. es handelt sich in dieser Anekdote um seine Vorankündigung. Wenn dem so ist, stellt Kleist hier ein so genanntes Gedankenexperiment seiner Dramaturgie an.